

障害学生支援の新しいビジョン

—学生も職員も教員も〈研究者〉である—

2008年2月23日

立命館大学衣笠キャンパス創思館カンファレンスルーム

ごあいさつ

【望月 昭（立命館大学人間科学研究所所長）】

みなさん、こんにちは。立命館大学人間科学研究所の望月と申します。最近春めいてまいりまして、今日もお散歩日和ですけれども、たくさんの方にご参集いただきありがとうございます。とりわけ、学外の方にもたくさんお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

今回のシンポジウムは、立命館大学の人間科学研究所が展開している、「オープン・リサーチ・センター整備事業」という文部科学省からの研究助成がございまして、その研究活動の一環として企画されたものです。2007年度から、大学バリア・フリーという研究チームが本格的に始動いたしまして、そこが本企画の中心となっております。それと同時に、ポスターにも共催としてありますように、立命館大学障害学生支援室、これも昨年度よりスタートした、立ち上がったばかりのものです。支援室と研究所が合同でこのような試みを行っております。

このシンポジウムでは、「学生も職員も教員も〈研究者〉である」という副題をつくっております。これは、障害学生の支援というような文脈の中では、とすると教員と学生というかたちの中で、学生の側は授業を聞くだけの立場のようになりがちです。おそらく、それだけではないんでしょうが、そういうかたちで、まとめて捉えられがちです。我々は、ここで1回、もう少し踏み込んで、情報等を保障するというだけではなくて、「研究する」と

いうことをどういうふうに支援できるか？を考えたいと思っております。これは、今いろいろなところで問題になっております研究倫理にもかかわってくることではないかというふうに考えております。今、その研究倫理のほうも試案ができつつありますが、その中で、十全に研究を進めるためには、一体、何を大学が守らなければいけないのか？あるいは、お互いに支援しなければならないのか？そういう観点から、改めてこの研究倫理を考えていきたい。そうした、大きな流れの中で、障害学生の支援というものを含めて考えていきたいと、こんな形で考えております。

今日は、まず外部の先生方、みなさんもよくご存知の倉本先生や高畑先生においでいただき、他大学や全体の状況の流れをお話いただきます。次に、立命館からは、今回のシンポを企画した吉岡さん、それから支援室の二階堂さん、最後に障害学生支援室長の中村さんという順で、現状と今後の展望についてのお話があります。

では、司会の吉岡から今回のシンポジウムの企画の趣旨と展望について、簡単に説明させていただきたいと思います。

では、みなさんどうぞ最後まで、長丁場ですけれども、最後までおつき合ってください。どうもありがとうございます。

(もちづき あきら)